
介入者はモブばかり

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

介入者はモブばかり

【NZコード】

NZ342N

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

俺は気がつくとダドリーになっていた。そう、全ては終わつた。
主人公はネビルだと！？

原作の重箱の隅をつつくような設定があるので読んでいなければ分かりません。

主人公、悪役が原作と違います。

そんな、ギャグ作品です。

作品を完全崩壊させてるので注意して下さい。

見切り発車です。

始まりは突然に絶望を『』える

真つ暗だった。どこもかしこも暗くて、何も見えなかつた。

俺はいつたいどこにいる。暗いな、何も見えやしない。

・・・・・田覚めよ・・・・・田覚めよ・・・・

ああ、俺寝てたんだ。

そつ思つて、田を覚ますと、体が縮んでいた。

俺は黒の組織を倒す為に、戦うのだ。戦う為に博士に作つてもらつた時計方麻酔銃とキック力増強シユーズでやつらを踏み潰してくれるわ。

ぐふふな事を考へていると俺の口に何かが流し込まれた。それに現実へと引き戻された。

「ダードちゃん、たくさん食べましちゃうね」

誰がダードちゃんだよ。そう思いながら、口を開けてドロドロの食物を食べた。どうやら、俺は、赤ん坊になつていたようだ。最初は巨人の島にでも連れてこられたかと思つたが、どうも違つていたようだ。

離乳食のおいしさに舌鼓みを打ちながら、状況を分析してみた。

まず、目の前にいる人たちを俺は知らない。

俺は、見知らぬ二人の人間を見た。どうしてか、せつせと食事を口

に入れてくるが、知つた顔ではなかつた。むしろ、日本人である俺に、外国人のがなぜ親切なのか分からぬ。

そして、俺は自分の体を見た。やはり、先ほど確認したとおりの赤ん坊である。しかし、その体は通常の赤ん坊よりも2まわりくらい大きいと思われる。つまり、デ・・・ぱつちやり系である。ここから、推察するに、どうしてだか、俺はこの人たちの子どもになつてしまつてゐるのだろう。これは、いわゆる憑依といつものだらう。

「こじで、一つの問題が出てくる。こじがどこなのか。そしてどの世界なのかだ。

ここが現実なのだとしたら、まだ許容範囲だ。しかし、もしも漫画の世界だとすれば、大問題だ。忍者の世界やゴンさんの世界はやめてほしい。とてつもなく、死亡フラグ満載だ。

おそらく、この家の感じからして、現代である事は間違いない。だからといって油断はできない。死神の世界、あるいはめだかの世界などといった、現代の話もある。ここで、この世界のヒントになるものを探そうと思う。俺の戦いはそこから始まるのだ。

その日の夜、家の前に赤ん坊が置かれた。そう、俺に弟ができたのだ。その子を恐れるように現両親が俺を抱きかかえながら、震えていた。なんとか、その子の顔をうかがうと、どこかでみた顔だつた。その子の名前はハリー・ポッターといつらしい。そして、全てを理解した。

俺はダーダドリー・ダーズリーだったのだ。

始まりは突然に絶望を『』える（後書き）

ホグワーツルート消滅。

断じて違う！！

「ハリー、遊ぼう

「うん」

俺があまりにも、ハリーを凝視している事に小首をかしげたハリーが口を開いた。

「ダド、鼻から血が出てるよ」

「心配するな。愛のなせる奇跡さ」

そう、俺達はとても仲が良いのだ。当たり前の事だが、俺はそこらの餓鬼ではない。前の俺は、高校2年で大学に飛び入学したのだ。日本じゃなければ飛び級して15歳で大学に入学する事ができた。どうして、俺が日本にこだわっていたのか、それは、俺がオタクだったからだ。アメコミもたしかに面白いが、日本独特なオタク文化をこよなく愛していた。

話が飛んだが、そんな俺が親の言いなりになるようなわけがないしこんな可愛いハリーをほつとけるわけがない。そう、俺は腐っている。だが、手を出す気はない。ハリオにはジニーちゃんという将来の豚がいるのだ。俺の弟を取ろうとはやつてくれるぜ泥棒猫が。

俺の弟の溺愛振りが二つをそつしたのか現両親もずいぶんハリオに優しくなった。今は、ハリオのめんどうを見るために、一緒の部屋で寝ているが、将来は、ハリオにも部屋が与えられるだろう。

ハリオのめんどうを見る中には、ハリオの魔力の暴走を抑える役も僕にしかできないだろう。どうしてかわからないが、夜中にハリオが悪夢にうなされて魔力を暴走させた時、俺は壁に叩きつけられた。俺が壁側で寝ていたため、逃げ場がなく、何とかハリーに近づき、顔に触ると魔力が弱まった。顔中触っているとどうやら、眉間のしわと、旋毛のあたりを押すと暴走はおさまるようだ。そんなこんなで、ハリオも俺の事が好きになつていて。

ハリオは間違いなくホグワーツルートに行くだろう。しかし、俺はおそらくいけない。だってポテンシャル＝ダドリーだ。無理である。ハリオの成長を見守れないのは嫌だが、メス豚どもに会わないのは嬉しい。会つてしまえば、JKもビックリの嫌がらせをしまくり、ハリオに嫌われてしまう。それだけは阻止しなければならない。

「ダド、どうしたの？」「

俺の考え込んだ様子を不安げに見詰めながらハリーが言った。

「ああ、行こうかハリー。俺より早く公園についたら、アメちゃんやるよ」

「僕勝つよ

結果を言えば、負けました。

最初からハリオに勝たせるつもりだつたけど、ちょっと焦らせてやろうと思つて本気で走つてみたら、ハリオは焦つた顔をしてぎゅっと田をつむつた。その瞬間、ハリオは姿を消し、何と公園にいたの

だ。姿あらわしかよ。偶然できたんだろひかど、卑怯な力だな。

序文（後書き）

断じておこなはあつません。

感動の涙必至、ハリオとの再開（前書き）

アメリカドラマのネタバレがある回なので要注意です。
入れ忘れていた話があつたので改稿しました。

感動の涙必至、ハリオとの再開

「ダド、紅茶のお代わりいる?」

「ああ、ありがとう」

ハリオは、ずいぶん気の利くショタツ子に成長した。俺はといえば、そうダイエットをして、スレンダーな体系に・・・ならなかつた。唯の頭のいいほっちゃり系だ。

「ダドは、もうじき行っちゃうんだね」

「ああ、そうだね」

俺がどこに行くか、そう、俺は10歳で大学に行く事になってしまった。どうして、そうなったかといえば、まず俺は、ハリーとの愛しきひと時を過ごす一方で未来知識を使い、ベストセラー小説を次々生み出したのだ。

それに目をつけた、お偉い教育者達が、図々しくも、ハリオと俺の愛の巣に攻め入って、面談の後にSATをさせられた。もちろん、俺は教育者達が目を見張る点数を出し、今に至るというわけだ。

本来、俺は文系の人間ではないが数式の検証や実証にとてつもない時間を使うよりは、記憶力を応用できる文系の方が良いのだ。ちなみに入学する大学はイエール大学だ。文系の学部にこの年で入学させるのは大変珍しい事らしい。

ちなみに、なぜアメリカなのかといえば、イエールからしか大学のお話がなかつたのだ。きっとイギリスについて変に介入してもらつては困るというJK呪に違ひない。

ハリオとは必然的に休暇や学年の終わりから新学年に向けてしかあえなくなるから寂しいが、それも仕方がない。

(ハリオ、お兄ちゃんハリオのこと一生忘れないからね)

「ダド、さつきからフ面相してるけど大丈夫？」

「げふん。大丈夫さ。それよりハリー、虧められたら言うんだよ。いじめつ子にオハナシしにくるからね」

「大丈夫だよ。ダドのおかげで、僕をイジメる奴なんていなくなつたもん」

たくましくなつたものだと、ほくそえみながら歓喜の涙を流した事はハリオには忘れてほしいと思つ。

2年がたとうとしていた。

え？ キンクリ？ 聞こえない。 聞こえない。

大学でのハッピーライフは中間地點を迎えた。

俺の学生生活は主に図書館ですごした。イエールの蔵書量は尋常ではない。この本を全て読みつくすのは、至難の業だらう。無理だといわれれば、やってみたくなるのが人間だと思つ。日夜挑戦中だ。そんな、本の虫な俺は学校の教授陣に重宝されている。記憶力を生かし、カンファレンスもビックリの早業で、本を探し出し、指定された文章が何ページに載っているか教えるのだ。カンファレンスのババアは、仕事を奪われて俺の事を嫌っている。図書館に行くと、よく後をつけられ、どの本を見ているのか探されているようだが、やつの見ている前では、自分で読めない言語の本をとるようにしている。それをさも理解しているように頷きながら見るのが俺の日課だ。

教授陣は俺に会うたびに、ダドペディア（自分で名乗つた）と呼び、本検索をさせられる。それは、あんたの仕事だろといふと、大抵アイスのクーポン券をくれる。釣られてしまふ俺が悪いのだが、これは明らかにJKの瘦せるなどいう修正力を感じる。だいたい、日本でJKなんていつたら爆笑だろ。ババアのくせに。でもちょっと本物のJKがローリングしてるところ見たい、むしろ一緒にローリングしたい。そんなことを考えていると頭に思い一撃がきた。

「痛つ、何するんだ、ダン」

「お前がまたエロイ顔してしてたから、また変態な事でも考へているのかと思つてた」

こいつの名は、ダンといつ。才能もないくせに将来小説家になりたいといつ無謀野郎だ。

何かにつけて、俺に絡んでくるウザ男である。こいつは、自分の人生を小説にする自伝かいてるくせに小説だと言い張る中一病を発病していく、人生自体が現実は小説より奇なりというのを表現したようだ。簡単に言えば、恋した相手がロイヤルファミリー並みの金持ちで、恋仲で進んでいたら、実はこいつの親父と相手の母親が昔に付き合っていたことが発覚して、すつたもんだのすえ、恋愛関係が義理のきょうだいになってしまった。

最初のうちはリア充爆発しどうと思っていたのだが、義理のきょうだいという事を聞いて少し同情した。どちらにしても金持ちである事には変わりないがな。ちなみにダンの義理の弟はガチの同性愛らしい。さすがにネタにできないが、写真を見せてもらつたときはショタつ子すぎでちょっと引いた。うちのハリオは成長と共にいかつくくなつていいくところにな。

「お前のフ「面相はいつもの事だが、涙まで流すとはどうしたんだ？」

心の嘆きが漏れてしまつていたらしい。

「それで、お前なんのようだよ」

「お前がこの前くれた携帯ゲームを家族がほしがってるんだよ。まだ、あるか？」

「何だたかりかよ。まああることはあるけど」

「それは良かった。お礼がしたいから、今度家に来いよ」

「いやだよ。お前の家、何か怖いもん」

「家族も会いたがってんだよ」

「上流階級なんかに会いたくないよ」

「美味しいアイスがあるんだけどなー、パーティシ工呼んで作らせるつて言つてたのにな」

「行きます、行きます。行かさせてください」

「おひ、じゅあ、また連絡するな」

「そうして、ダンと別れ、俺は自分の部屋に向かつた。

部屋に戻ると、俺はいつもの儀式をする。

まず壁にかけられている、ハリオのポスターに一礼する。ちなみに

この部屋に入るやつには、皆にそれをやらせている。

そして、俺はハリオの秘蔵写真集アルバムをめぐり一通り見ると合掌をして閉じる。

これが、俺の朝起きてからと家に帰ってきてからそして寝る前の習慣だ。

この行為をダンは変態だといつたが、失礼なやつだ。唯のパソコンだ、日本じゃ当たり前だといつておいた。その証拠にいくつかの文献を見せておいた。いわゆる同人誌というやつだ。ダンは、アメリカでは控える、捕まるぞと言われた。司法に俺の愛が止められると思っているのか、まったく馬鹿なやつだ。

そんな事を思いながら、俺は作業に取り掛かった、俺が今作っているのはたまごゲームを改良した、モンスターのゲームだ。このくらいの物だったら、なんなく作れる。趣味程度に作っているのだから、問題はないだろう。未来知識は大いに活用させてもらつていい。小説もそのひとつだ。ちょっと罪悪感に駆られるが、俺はハリオのために頑張るのだ。俺はマグルだから、魔法界には関われない。だからこそ、マグルである俺が社会的地位に着くことで、魔法界と人間界の橋渡しをし、ハリオ帝国を築くのだ。ヴォルの野郎はどうせハリオが倒してくれるから問題ない。

原作というのは異分子が関わるからずれるのだ。しかし、俺は、ダドリーだ。関わるはずがない。それに、ハリオは今ホグワーツの一年生だが時々手紙をよこしてくるが、原作に乱れない。俺に手紙で聞いてきた内容が、ニコラスフーリーって知ってるか聞いてきた。いちょう、大学図書館で探した。それを見つけてレポートを書いて送つておいた。ついでに、ライターと懐中電灯（太陽光にもつとも近いと言われる）を送つておいた。悪魔の罠も真っ青だぜ。

ただ、その後、何となく気になつて調べてみたら、魔法界にしかありませんない情報が載つた本まで見つけてしまつた。俺が貴重書の棚を見ていたら、上級魔法薬とかかれた本や最も強力な魔法薬、あなたはマグル関係の仕事を考えていますね？等といった明らかに魔法界の本があつたのだ。イエール図書館。

興味がわいて教授に頼み、イエール図書館の書庫の閲覧許可をもらい調べてみると、深い闇の秘術とかかれた本があつた。俺は、それを見なかつたことにした。唯一つ、確信したことがある。それは、同じく書庫で見つけた本の中に、マグルの中で働く方法イエール板と書かれている本があつた。イエールにも紛れ込んでいるようだ。うん、無視無視、俺には関係ないさ。俺の魔法使いはハリオだけだ。そんなハリオとももうじき再開を果たす。

そう、ハリオが一年生を終えるのだ。俺は今、9と3／4に猛烈にドッキドッキなのだ。

ハリオ再開の前日

「ね、ね、寝過ごしたー」

俺は寝巻きのままで飛び出した。

走りながら歯を磨き、そこらにいた知り合いから水をぶん取ると、うがいし、木に水をやっておいた。

「どけ！貴様ら、明日までにイギリスに行かなくてはいけないんだ」

ダドペディアのお通りになると、学生達は素直に道を空けた。子

ども相手に喧嘩するやつもないし、何より事典として扱うために機嫌を損ねさせたくないというのが本音だろう。

道まで全力疾走して、タクシーを拾おうとするのだが、なかなか止まってくれない。道に罵声を浴びせていると、一台の車が目の前に止まつた。

「乗れ」

俺は、ハリオに会いたい一心で、その車に乗つた。

「どこに向かっているんだ」

「イギリスト

「そいつが、わかつた。空港に向かえ」

男は、運転手に指示を出すと、こちらに向き直つた。

「お前、ダドリーだろ」

「ハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオ

「そつか、身内に何かあつたか」

男は、何か考えた素振りを見せ、言った。

「安心しろ、俺が最速で届けてやるよ」

親切な人にイギリスまで届けてもらつた。

なんと、服まで着替えさせられていた。いやー！俺の貞操がー！！！
ハリオだけのものだつたのにー！！！

名前を聞くのを忘れてしまつて御礼（文句）もいえないが、心の中で感謝しておこう。

現両親と再会しハグをしてから、キングクロスに向かつた。俺は、ついたやいなや真っ先に9番線と10番線のホームに向かつた。こか、そう思い、俺は柱に突つ込んだ。グシャツという大きな音と共に、その場に崩れ落ちた。

「俺の邪魔をしようとは良い度胸じゃねえか」

怒りに満ち溢れた俺は、渾身の力で壁を蹴つた。何度も何度も蹴つていると突然人が壁から現れた。蹴りを止めるまもなく思いつき蹴りを放つてしまつて、大丈夫か確認するまもなく、壁の中に消えた。しばらくして、恐怖に引きつった顔と怒りの表情で出てきた人が俺をガン見した。

「すみません。入れなかつたもので」

「あ、気をつけたまえ」

こめかみを引くつかせながら男は言った。男に連れられた少年があまりにも可哀想だったので、ハリオに渡す予定だった飴の一部を渡しておいた。

「……こんななもの」

「捨てるの？」

捨てようと、地面に叩きつけようとした少年に俺はすかさず言った。
少年はビクリと震えた。

「美味しいから食べなよ」

少年は震えながら、飴を口に入れた。ハツとしたように顔を上げた。
どうやら美味しかったようだ。まあまあなツンデレではないか。デコだが。

「少年よ大志を抱け」

少年たちが去っていく背中に向け大声で言つておいた。

「ダド、何してるの？っていうか」

懐かしき美声を聞き振り返るとそこにハリオがいた。

「ハリー会いたかったぜ」

俺はハリオの前ではクールを気取つてるので体はハリオに抱きつこうとしたが、強靭な意志の力で押さえつけた。すると、ハリオの

ほうからハグをしてきた。

(やべ、鼻血でさう)

俺は、優しくハリーの背中に手を回した。

「ハリー、そのトブ誰？」

ハリオの後ろから声をかけてきた赤毛の少年が言った。

「誰がデブだ。これはJKの呪だ！ 魔法使いだつたら呪を解け！！
それと俺はぼっちやり系だ」

引いた顔をする赤毛にハリオがやわしく語りかけた。

「ロン、紹介するよダドだよ」

「ああ、靴下の」

靴下といつも葉を聞き俺は反応した。

「ハリー、クリスマスプレゼントすいじく嬉しかったよ。ハリーの靴
下をくれるなんて、自分の足も気にせず悪かったな」

「ダドには、僕の物があつたほうが良いかと思つてね。ダドのプレ
ゼントのカシミアのマフラー、凄く暖かかったよ」

後ろからロンが声を上げた。

「そうだ、僕ももうつたんだ。ありがとう」

「ハリーがお世話になっているからね」

「俺は、ハリオの友達にも送つておいたのだ。せいぜいハリオ帝国の基礎となるがいい。」

「ダード、でもやりすぎだよ。グリフィンドール生全員にプレゼント贈るなんて。マクゴナガル先生や校長先生にも贈ったんだって、それにはスネイプにも」

「御世話になつてゐるんだから当たり前さ。スネイプ先生にもお世話になつたんだわ」

「ダード、何が知つてるの？」

「ハリーが手紙で教えてくれたろ。厳しくあたるつて事は、それだけ目をかけられているということだろう?」

「そういうことか」

もちろん、俺は、全てを知つてるので、スネイプにもプレゼントを贈つておいた。ついでに、クイレルにもありとあらゆる魔除けを

「ダード、またフ面相してゐるよ

「ダード、またフ面相してゐた。

「ああ、すまなかつたな。あれ、ロン君はどうかな

「わざわざ帰つたよ

「やうか、では俺達も帰らうか

やつとひて、家に帰つてこつた。

感動の涙必至、ハリオとの再開（後書き）

ダンとか分かる人いるんですかね。

眠いーよ。深夜のテンションがハンパないです。
ウィキペディアがこの時代には存在しないと言つシッ ハリは無しの
方向でお願いします。

やべ、俺口イヤルファミリーにならなかった（前書き）

時系列は秘密の部屋です。

注意、髭の配管工とバイオな災害の話、卵型ゲーム、電子モンスターのゲームのファンの方はご注意ください。

やべ、俺口イヤルファミリーにならなかった

「僕、ロンの家に行くんだ」

俺は、俺の事をつづいて邪魔をしてくるヘドウイグとの戦いを止めた。俺は絶望したハリーが行ってしまつ。俺を捨てて、行つてしまふんだ。あのロナルド・ウイーズリーのもとへ。

「学校に行く前にね、少しだけロンの家に行く事になつてるんだ。今日手紙が来て日にちが決まった」

俺はハツとした。そうだ、これは秘密の部屋の話しだと思つたのだ。そして、思わずヘドウイグを投げ飛ばした。

「ハリーが家出するのかと思つたよ」

「そんなわけないよ」

「では、バームクーヘンでも買つておへから持つていくとい

「良いよ、そんなの」

「駄目だよ。それが礼儀というものだ。礼儀を欠けばキレられるぞ

その前に、イベントがあるがと思った。実のところ、俺はそのイベ

ントまではいれない。

大学からの要請で行かなければならぬのだ。始めは、ハリオとの時間の邪魔だと断つたが、あれよこれよどどしても断れなくなつていて。おそらく、修正力だらう。俺がハリオといえば、閉じ込めなんてことをしないので、必然的に空飛ぶ車イベントが消滅する。そうすると、最終的にハリオはアラゴグの餌食になつてしまふ。それは、困るのでしかたなく大学に出頭する事になった。

「ダドはもうすぐ行っちゃうんだよね」

「悪いな、俺も断れなくてさ」

「ダドにはホグワーツのことたくさん聞かせてくれよ」

「俺が行くまでに、たくさん聞かせてくれよ」

「そういえば、どうしてニコラス・フランマルのことを知っていたの？」

「マグルの世界でも有名な人だからね」

「そりなんだ。マグルの話だから、僕達とは関係ないと思つてた

「うん？じゃあ、あの情報は役に立たなかつたのか？」

「えつとね、ハーマイオニーがマグルの情報だから必要ないって
言つてや」

「見てないのか・・・」

「うー、うめん。でも、事件が終わつてから読み返したら、すぐ役
に立つ情報だつたねつてハーマイオニーが絶賛してたよ」

修正力が、そう想いながら返答を返した。

「それは、光栄だね」

「ハーマイオニーが、ダドと話してみたつて言つてたよ」

「いすれ、機械があればね」

「こいつと笑つて返答を返した。

そうして、毎日のハリオとの楽しい日々も終わりを向かえ、俺は大
学に帰還した。

教授に呼び出されて、教授の部屋の扉の前でノックして入った。

「ああ、きたか」

この教授の名前は、アルバート・レスターという、俺を事典代わりに使う筆頭なのだ。教授の用事がなんだらうと思い聞いてみると、娘に彼氏がてきて会いに来るそうで一人じゃ心細いだとか。

「あんた、緊急の要件で、俺がいなけりやあんたの人生が終わるつて言つてたじやないか」

「何言つてんだ、俺の人生の一大事だろ」

「もう、帰ります。そつこく飛行機に乗つてイギリスへ」

「頼むよ、いてくれよ。今度、好きなものおくるから

「・・・寿司でいいですか」

「ガキの癡に生意氣な」

「帰ります」

「わかった。わかったから、いてくれよ」

「はあ。娘さんいくつですか?」

「14歳だ」

「教授ともあるうじが、何をそんなにピカッてるんですか」

「だつてローティーンの話なんてわかんないし。ダドリーと年齢近いからいたら少しは楽かなって思つて」

「ダメオですね」

「・・・子ビも怖いんだよ。何考へてるかわからない」

俺はため息をつきながら、了承した。今帰つても修正力で帰れなくさせられるんだから。JKの力で飛行機を落とされたらたまたまじやない。

そうして、俺の早い学校生活は幕を開けた。

「あれ？ ダードコーヒーなんだと」ハジで向こうへ。

俺が喫茶店でパフェを食べている邪魔をする声がした。声をかけてきたのはダンだった。

「パフェ食つてんの」

「お前つて、じつしてみると本当に子供もだな」

「失礼な。なんだと思つてたんだ」

「いやー喋つてると、時々、同世代かと感じさせられるからや」

「んなわけないだろ。お前らみたいな髭男爵と一緒にするなよ」

「髭男爵つて、それより、食事会の日が決まったぞ」

「は？」

そう言いながら、俺はアイスをほおばつた。

「話しただろ、俺の家族が会いたがってるつて

「ああ、そうだったな。んで、いつ？」

「3週間後の予定だつたけど、お前今日は暇なの？」

「まあ、得にする事ないし

「ちゅうどこい、じゃあ今日今から俺ん家来いよ

「え？」

「ちゅうど家族揃つてるしや、早い方がいいだろ」

「いやだつて、パーティシエ呼ぶんだろ？予約みたいなものあるだろ」

「あー、多分大丈夫だ」

「意味わからない。まあ別に予定ないからいいけど」

そうして、俺は食事会に招待された。

豪華すぎる食事だった。アイスも大変おいしゅうございました。
まあ、なんていうか、家族だけじゃなかつた。なんか昔から付き合
いのある、親友みたいなものもいた。全員、ロイヤルファミリーだ
つたし美女ばかりだった。何かむかついた。

その中の一人は、なぜか、親しげに声をかけてきた。どうやら俺を
イギリスまで送つてくれた人だったようだ。身内は無事だったかと
聞かれ、意味がわからなかつたが元気ですと答えると、意味ありげ
に、そうかと言つていた。

その後は、俺が作ったモンスターのゲームを渡すと、楽しそうに遊
んでいた。男の子はやはりモンスターが良いらしい。

そして、どうしてか、たまごとモンスターのミニゲームを売り出す
事になつてしまつた。バーダイさんごめんなさい。でも、赤字でな
かつたから良いでしょと無理やり納得しておいた。

その後の販売戦術は見事だつた。ダンのきょうだいが結構有名な人
らしく、ゴシップ誌に出るときにはゲームを見せびらかした。あつと
いう間に流行の最先端になつた。大量生産はせず、どのくらい流行
るかみこして生産したほうがいいと忠告しておいた。その方が値は
釣りあがると殺し文句をつけると、お前とは気が合いそだと言わ
れた。

俺は小説家ゲームの発明家になつていつた。そして俺はフリー
のアイディアマンとなつた。力コソから依頼が来た時は、生物災
害のゲームを出せと言つておいた。任天堂から依頼が来た時は、髭
の水道工がカーレースをする話を提案しておいた。当たるのは確實

だ。

そんなこんなで、また一年がすぎた。ハリオへのクリスマスプレゼントはもちろんたまごとモンスターのゲームを渡した。とっても喜んでお返しにハリーが使い込んだ手袋てくれた。

そういうえ、ハリオはホグワーツが怖いといって手紙をよこして来た事があった。秘密の部屋イベントが起きていたのだなと思い、眼鏡はずつと掛けているといつておいた。ついでに、ハリーの学校つてトイレとか水道の水つてどうやって流れてると聞いておいた。ふふふ、ナイスアシストだ俺。ちなみに近況報告で莫大な金をもらつたと報告しておいた。

そうしたら、白紙の紙が送られてきた。きっとハリオはおっちょこちょいだから、手紙を書き忘れたんだなと思った。可愛いやつめ。

お礼を言いたくてしようがない、今か今かと俺はキングクロスでハリオを待つた。去年の一の足は踏まない為、柱から少し離れていた。

「あつダド！」

ハリオと一緒に赤毛と縮れ毛が出てきた。俺は、会ってなくとも人の名前がわかるので特だ。後ろに赤毛の女子がいなければもっと気分が良いが。

「え？この人がハリーの兄弟？」

縮れ毛が騒いだ。

「はじめてまして、お嬢さん。ダドリー・ダーズリーだ。今年は大変だつたそうだね。元気な姿が見れて良かつたよ」

ハーマイオニーは口をパクパクさせていた。

「あ、あのダドリー・ダーズリーですって！－ハリーあなた何も教えてくれなかつたじやない」

「え？何のこと？ダドの事は一年生の時から君には言つてあつたはずだけど」

「だつて、ダドリー・ダーズリーだなんて言わなかつたじやないの。10歳で大学に進学した天才児にしてベストセラーを次々出す小説家」

「大学つてなんだ？」

ロンが聞いた。

「大学つて言つるのは、魔法族には説明が難しいわね。簡単に言つたら、0歳でホグワーツに入学するようなものよ」

「0歳つて喋れないじやないか」

「もうーじゃあ、ホグワーツを一年生で卒業して魔法省で仕事するよつなものよ」

「そいつは凄いやー！」

「ダドつてそんなに有名人だつたの？」

不思議そうにハリオが聞いてきた。

「うーん、どうだろ？ 珍しい事は確かだね」

「ふーん」

「ハリーだつて有名だろ？」

「僕が？ そんなことないよ」

さすがハリオだ。謙遜を心得ている。

「あの、今度おファンレターを送つても良いですか？」

ハーマイオニーが聞いてきた。

「敬語はいらないよ。ぜひ送つてきて。そうだ、君に本をあげるよ

やつ置いて、カバンから本を出し渡した。

「まだ、未発売の本だから内緒だよ」

ハーマイオニーは田を輝かせて喜んでいた。子どもは無邪氣でいいなと思っていると、恐らくロンの父親であろうアーサー・ウィーズリーが話しかけてきた。

「今度、私にもマグルの事を教えてほしいね」

「ええ、良いですよ。いつでも聞いて下さい」

そうして、別れ、俺達は、家に帰った。

家に帰ると、ハリオのお帰りパーティーをした。両親も子ども達が一人ともいなくなるので帰つてきてとても嬉しそうだった。

やべ、俺口イヤルフアミリーにならなかった（後書き）

今回の話に出てきたゲームに思い入れのあるかた、申し訳ありません。

次回、俺は気づいていなかつた。この世界がハリー・ポッターの世界でない事に・・・なお話。

ハリー・ポッター……じゃないだと！（前書き）

ハリー・ポッター崩壊です。嫌な人は読まないでください。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！

俺が、花に水遣りをしながら、横にいるハリオを舐めまわすように見ていた。ハリオは何故だか震えながら綺麗な花を力強く抜いていた。おいおいハリオ天然も良いが、綺麗な花を抜いたら可哀想だろ。おっちょこちょいな可愛いやつめ。

俺は、ハリオを傷つけまいと別の事に注意が向くよう話題を振った。

「ハリーはずいぶん背が伸びたね」

「ダドはまた、体が大きくなったね」

俺は無言でハリーに水を掛けた。

「ちょっと、何するんだよ」

どうしてだか、ハリオはズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「ああ、手が滑った」

そういうと、ハリオは俺からホースを取り上げようとした。だが、あきらかに俺のが力が強いので一生懸命引っ張っている。

「僕もダドに水掛けたい」

「嫌だよ」

「ダードとお揃いが良いのにな」

そういうて落ち込んでしまった。俺はしかたなくハリオにホースを渡した。ハリオは俺に水を掛けた。

「これで一緒だね」

「や、そうだね」

そういうしてると、ペチュニアが窓から声をかけてきた。

「何してるの！風邪を引くからお風呂に入りなさい」

俺達は一人揃つてはいつと声を上げ、風呂に行つた。

一人で湯船に入つていると、ハリオが言つた。

「僕つて本当に大きくなつてるんだね」

「ゲフン、ゲフン、な、何が」

「だつてこの前まで、よく一緒にお風呂に入つてたのに、今じゃ狭く感じるから。」

「そ、そうだね」

「一緒にお風呂に入るのもこれが最後かもね」

「心配するな、風呂をでかくすれば良いのさ。すべては金だよ」

ハリオはなぜだかため息をついていた。
心配するな、俺はハリオの為に湯水のように金を使うために頑張つたんだ。

夜、みんなが寝静まつたのを確認すると俺はキッチンへ行つた。
キッチンで夜の残りのビーフシチューを皿に盛り、パンを手にして、玄関を出た。

そうして、茂みの中に向かうと小声で言つた。

「あ、こんなところに美味しいそうなシチューがあるぞ」

そう言つて、俺は、その場を後にしてた。

しばらくして、出てきた黒い大きな犬がご飯を食べる姿にニヤリとした。

その日から、朝はパンとベーコンをラップで包み、それと水筒に入れた牛乳を茂みに向かつて思いつきり投げた。水筒は後で玄関の前に置いとけよと叫んでおいた。ハリオには、不思議がられたが最近俺が開発中の頭のよくなる方法だと言っておいた。次の日の朝ハリオが同じ事をしていて、少し心配になつた。

風船おばさんイベントが起きた。案の定ハリオは家を飛び出していった。

その日は、庭にステーキを放置した。

せいぜい、ハリオの為に地べた這いずりまわるが良い。俺のハリオをかどわかしたら唯じやおかないからな。

俺は、気ままに犬にえさをやつたりしていながら、新学期の始まりを迎えた。

学校は最高学年を向かえ進路の事を考えなくてはならなくなつた。

大学院に進む道もあつたが、正直に言つて俺はもう充分なほど金を持つているし、大学図書館の本も八割読んだ。勉強意欲もあるにはあるが、ハリオのために勉強していたのだ。それに見合ひの価値はない。

ただ、大学の教授達はダドペディアがいなくなると困ると俺を引き止めた。

そんな事を考えていた時、ある教授からインターーンで大統領のオフィスでお手伝いをする話が来たので受けた。俺は、成功者であるし小説家としても地位を築いている。そして、子どもという事でクリーンなイメージがある。顔としてはもつてこいのようだ。俺の思惑はハリオ帝国の為だがな。

未来知識はおおいに役立つから、大きな事件は微妙なニュアンスで伝えて防がせるようにしておいた。

そして、どうやらここにも魔法界のものがいるようだ。ある部屋の中からポンッという音がするとさつきまで人がいなかつた部屋から人が出てくるのだ。監視体制大丈夫なのかと心配になる。

俺はといえば、基本的に書類仕事というよりは、大統領の演説文章のお手伝いをさせてもらつていて。俺の記憶力を用いながらここでもダドペディア扱いをされる。大人は汚いなと思つてしまつ。

そんな事をしているせいか、俺はSPをつけられた。

この人が死ぬほどうざい。すぐに、電話をかけたり、音がすると伏せろと叫ぶのだ。すぐに銃を出すから危ないなと思つていたら、案の定事は起こつた。

俺がアイスを買いに行き、並んでいると小さな子が親に連れられ風船を持つて歩いてきた。そんな時、子どもが石につまずいて転んでしまい、持つていた風船が地面と子どもの間に挟まれパンッと音をたてて割れたのだ。その音を聞いたSPが銃を出したのだ、その場は叫び声におわれ銃を向けられた女の子は泣き出すといった戦々恐々の事態に陥つた。俺は急いでこの人は警察官でビックリしちやつたんだよと子どもに説明した。

俺はアイスも買わず帰宅し、アイスも買えなかつたじやないかと怒つた。

「本当に・・・すまなかつたと思つていて」

間の長い謝罪の言葉を述べてきた。

銃はめつたに出すなといったら、それはできないらしい。俺には自衛能力がないから自分がいち早く危険を察知しなければいけないのだと。そんなに危ないのかと聞けば、SPは自分の娘はしおりゅう誘拐されるだの奥さんは殺された、仲間も何人も死んだとか。話を聞くうちに思ったのは、こいつ死亡フラグ製造マシーンなんじやないか。こいつの側にいるやつは皆死ぬと中一的な事をほざいていたが、本当っぽいから引かざるをえなかつた。

SPを変えてほしいと大統領に頼んだが、駄目だと言われた。SPの事を調べてみると、優秀には優秀だが周りの話を聞かない厄介いものらしい。ようは俺に押し付けたということだ。ただひとつ気になることが出た。このSPの護衛対象は必ず死ぬということだ。俺を殺したいのかと悪意を感じる。

そこで、解決策として俺はSPに自衛術を学ぶ事になつた。銃とか撃つたことないと言つたら鼻で笑われた。

とてつもなく厳しい訓練の末、俺は何とか銃の撃ち方や当て方、人の気絶させ方、首の折り方、主に一撃必殺の方法を学んだ。ただ、長距離射撃や爆発物の使い方（主にC4）を学ぶ必要があったのかは謎だ。

最終的にはSPはにやりと笑つて免許皆伝だといつていた。唯一、嬉しかつた事は、その鍛えられたのせいでダイエットに成功した事だ。JKの呪はさすがに死亡フラグマシーンのSPに敵わなかつたようだ。

これで、ぱっちゃり糸じやないぞ。

そんな、ある日、俺が紅茶と半分欠けたチーズケーキを横に置き、小説（盗作）を書いていたところ、後ろにあきらかにSPではない氣配がしたので机の下に備え付けてある銃を引き抜き、自然な動作

で右に回転しながら銃を構えた。

「何者だ」

「はて、君はもう少し体が大きかつたと思つがパンツ

銃声が響いた。俺が威嚇射撃をしたのだ。

「答える、お前は誰だ」

「ホグワーツ校長、アルバス・ダンブルドアという。君の義理の兄弟の先生じやな」

「・・・証拠は?」

「証明は難しいの、君はマグルじやから」

「ハリーが2年生の時の校長室の合言葉は?」

「レモンキャンディーじゃ」

「ハリーが一年生になるまで食べられなかつたお菓子は?」

「パーティーボツツの百味ビーンズじゃよ」

ハリーが話していた内容と一緒にだから、恐らくアルバス・ダンブルドアに間違いないと思った。

「それで、マグルの俺になんのようですか？校長先生」

「君の本来のしゃべり方に戻してくれても構わんぞ」

「俺の喋り方をどうして知っている？」

「わしは、ちと耳が広くての」

「あなたの耳に変わる人が僕の近くにいるとこいつとか

「うむ、噂通りすこぶる頭が切れるの」

「それで、用件は何ですか？」

「君にマグル学の教授に就任してもらいたい」

「・・・前任の先生は？」

「死亡」フラグだとよくわからない理由で退任したが

「同じ理由でお断りする

「ふむ、マグルの中では常用語かの。わしもマグル学が専門ではないからよく知らぬが。時に聞くが、君はハリーを溺愛していると聞く。ハリーを身近に起きたいとは思わんのかね」

「俺はハリーを影から支えられれば良いこと思つてゐる

「当たり前でしょ。生き残った男の子なんですから

「ふむ、君はハリーに危機が迫つていると思つてゐるようじゃやの」

「ハリーがかかる？」

不思議そうな表情を浮かべるダンブルドアに嫌な予感がした。

「ハリーは、ヴォルデモートを倒したのではないのですか？」

「それは、ネビル・ロングボトムの事ではないかの」

「嘘だ！……」

俺はそう言ひと氣絶した。

俺はその日、離見沢症候群を発病したのだった。

ハリー・ポッター……じゃないだと!（後書き）

「ハリー・ポッターと」ではなく「ネビル・ロングボトムと」
そんな話でした。

JKの呪なんてダドリーの妄想でした。

番外ヒッポグリフなあの人（前書き）

キャラ崩壊注意報が発生しております。

番外ヒッポグリフなあの人

我輩はヒッポグリフである。

名前はまだない。

呼ぶならば、グリちゃん、グリ兄さんと呼んでほしい。

我輩は、元人間であった。魔法薬学の教授であり、もつとも、ダンブルドアに信頼された者であった。

我輩の前世の名はセブルス・スネイプという。

そんな、我輩はハリー・ポッターに記憶を渡し死んだのである。

そして、気がつくと、何故だか、ヒッポグリフになっていたのだ。驚いたことに我輩の魂は時間を遡りハリー・ポッターの入学年まで来ていた。たしか、最後の記憶は、死後の世界での胸糞の悪い4人組を追い回していたはずであった。

我輩の最近の苦悩はハリー・ポッターについてである。我輩が死ぬ前に見たあの慈愛に満ち溢れ、あの悲しそうな目、そうまるであれはリリーの目であった。そんな目を見た成果、ホグワーツで一方的な再開を果たしたとき、ヒビンブルンクエーなのである。

ホグワーツで、教授をしておる昔の我輩に虐められると知ったときは、我輩に頭突きをかましたほどだ。我輩めりリーの息子を虐めるとは許さんぞ。

そんなこんなで、今日も我輩はホグワーツを満喫中だ。

ある日、我輩は授業で見せるとの事でハグリットに呼び出された。どうやら、我輩にはバックビークといつ名前があったそうだ。

我輩は眩暈がした。そうである、今年、我輩は処刑される運命にあつたのだ。最終的にハリー・ポッターに助けられるとはいって、犬に乗られるのは「めん」つむりたい。

ただ、ハリー・ポッターに乗られた時は大いに気分が良く、上昇したり下降したりと楽しんだ。

ハリー・ポッターは大いに喜んで我輩も満足である。動物になつたせいが撫でられるのは気持ちよかつた。ハリー・ポッター限定であるが。

そんな時、ハリー・ポッターを突き飛ばした不埒者がいたのだ。怒り狂つた我輩は、不埒者に、怒りの突進頭をみまつたのである。フンと体を揺らすや、ペツと唾を吐きかけてやつたわ。見ると見慣れた金髪だった。ドラコ・マルフォイであった。

我輩は、やつてしまつたのである。処刑される。どうしようガクブルなのである。

ハリー・ポッター助けてくれるのであるよな？

唯、誤算が起きた。我輩の知らぬことが起つたのだ。そう、シリ

ウス・ブラックがホグワーツを闊歩していたのだ。その隣には、なんとピーター・ペティグリューまでいるではないか。

とりあえず、必殺の頭突きをしておいたが、どうなつてているのだ。我輩は、人語が話せない、確認が取れないのである。

我輩、ナギーの檻に入れられたくらいやばい状況なのではないだろうか。

番外ヒッポグリフなあの人（後書き）

や、やつてしまつたー。
ちよつと後悔します。

ダドリーと出会ふと熙こんですナビ。

介入者の悪意

「知らない天井だ」

見回してみると、どうやら部屋のようだった。とてもなくエキゾチック。おかしなものしか目に付かない。

俺は、そこで状況を理解した。

俺はテロリストに拉致されたのだ。くつ！まさか俺の下宿先が襲撃されるとは、想定外だ。

これは、非常に不味い状況だ。このままいけば、俺はきっとテロの重要事実に気づき、救出されるも証言する直前に間違いなくスペイの誰かに殺されるだろう。そうして、俺は24時間以内にテロを防ぐ壁にされる。テロが起こってしまえば、生存フラグは、俺のSPのみ。他の人の生氣を奪う事で、生き残っているに違いない。

ここまで思考わずか一秒！

俺の状況把握能力が伺えるだろう。ダドリー万歳！！

「ふむ、それもマグルの常用語かの」

気がつくとダンブルドアが横に立っていた。どうやら、テロリストではなくヒゲリストに誘拐されたようだ。

「いいは、まさか

「ホグワーツの校長室じゃよ」

最初から知っていたとばかりに、フッと血潮の笑みをこぼして言った。

「どうして、つれてきたんです？」

「じゃから、君にマグル学の教授になつてもうらつたまに

「断ると言つたはずです。それにホグワーツにはマグル避けがかかっていたとハリーに聞いたのですが」

「そこが、不思議なところじゃ。どうも、君には効かぬようだの。今も、用事は思い出せないじゃろ？」

「やうですね。 しいていえばアイスを食べに早く帰りたいですね」

そういうとダンブルドアは、どこからともなくアイスを出した。ヒゲリストめ魔法チートとは恐れ入ったわ。

「わしもアイスは好きじゃよ」

俺は、アイスを口に含みながら聞いた。

「それで、俺にマグル避けが聞かないところのは？」

「実はの、君が寝ている間に呪文をいくつかかけてみたが、何も効かなんだ。君を運ぶのは苦労したよ」

「効かなかつた？」

俺には、その意味が良く分からなかつた。いかに知識を詰め込んだとはいえ、魔法のように信じる者は救われる精神の、感情で威力が変わるサイコフレーム的なものなんて理解できないもの。

「恐らく君は、ハリーを肌身離さずずっといたじゅう？ 魔力が暴走している時もじゅう」

俺は、某天才科学魔法師の弟の事を思い出した。

「そうですね。まさか、それで魔力に耐性ができたなんていうんじやないですよね」

「そのとおりじゃ。大変めずらしことではあるが。そのおかげで、君にお願いしやすくなつたがな」

「魔法が効かないなら、ホグワーツにいても大丈夫だとおっしゃりたいので？」

「そのとおり。そして、君は受けたじゅうじと確信しておる」

たしかにと思った。魔法チートどもに魔法効かないって天敵だ。雷

に「ゴム。蛇丸が俺に魔法をかければ某自称神のよくな顔をする事になるだろ?」。

「魔法が効かないなら、まあハリーの近くにいるのも悪くないです。ですが、条件があります」

「条件とは?」

「今、この世界で起きている事を全てあなたの知りうる限りのこと話をもらいます。条件は、その後です」

ダンブルドアいわく、生き残ったのはネビルであり、ハリーの両親は忽然と姿を消した。

ハリーが一年生の時に起きた事件はたしかにハリーも関わっていたが、最終的にクイレルを殺したのはネビルであり、ハリーは途中の仕掛けで挫折したらしい。

2年の時、ハリーはネビルと共に秘密の部屋に向かったが、ロックハートの足止めで、残る事になつたらしい。

今年は、ヒッポグリフを救つたらしい。

どう考えてもつんできます。来年でこの物語終了です。本当にありがとうございました。

「大丈夫かの?」

俺のあまりの絶望振りにダンブルドアは声をかけた。

俺は、状況の把握と絶望的な事実で体を猫背にしながらも何とか聞いた。

「シリウスとな？シリウスはジョームズとリリーを探し回っている

「ペティグリューは？」

「ピーターもやがじゅうせん

「ジョームズとリリーが消息不明になつたというのを詳しく伺いたいですね」

「ロングボトム夫妻が襲われ、ネビルが生き残つた。

しばらくしてのべラトリック・スレストレンジ、フロンリー・グレイバッカ等のメンバーがのポッター一家を襲つたのじゃ。

駆けつけたシリウス、リーマス、ピーターがどうにかして捕縛したのじゃが、ハリーを残して忽然と姿を消しておつたのじゃ

「ハリーをダーズリー家に預けた理由はなんですか？」

「リリーがダーズリー家の秘密の守人どじゅつたから。その方が安全だと考えたのじゃ」

「今までの話から察するに、リリーは生きていると思つていてるですね」

「秘密が引き継がれておらんから」

「しかし、おかしいですね。ポッター家の秘密を漏らしたのは誰なのですか？」

「不思議な事にポッター家の秘密の守人はジエームズ自身だったのだ」

「自分でもりしたと？」

「分からぬ。それしか考えられぬが、なぜそつたのかはわからんのじや」

俺は、しばらく考えてからもつ一度を口を開いた。

「そういえば、どうしてハリーにはシリウス等が会いに来ないのですか？」

「それは、守人のせいじゃね。わし意外秘密を聞いておらんから
の」

「そうだつたのかと思いながらアイスを口に含んだ、このアイス不思議な事になくなると補充されるといつチートなアイスだ。

「ネビルの方はどういう感じですか」

「どうせ？」

「魔法の実力です」

「自身がなく、あまり良いとはいえないが、才能はあるの。じいじやといつ時には力を發揮しておる」

「ネビルはどう介入を？」

「ネビルは今年、特に何もしておらんが」

俺は、頭を抱え込んだ。

「これ、何？まじで、俺が、介入しなきや、来年ネビル死んで・・・死んでどうなるんだ？」

ハリオ関係なくないか。

いやいや、待てよ。もはやその時点で原作情報「」と同然になる。

ネビルは死ぬ復活、そして死亡だらう。杖イベントなんておこいらな
いだろう。だって、ネビルだもの。

最終決戦時までの成長で強くなつていいく、DA前でのネビルの実力
では決闘すらできないだらうからだ。

不死鳥の騎士団イベントは起こらない。もはや、生き残った男の子
の予言など意味がなくなるからだ。

そうして、謎のプリンスで、ダンブルドア死亡だろ。

ハリオ恐らく、レジスタンスにでもなるだらう。うん、つんでる。
もひ、今年どうにかしなきゃいけない。少なくとも、ネビルを修行
させなきゃならないな。

・・・いや、待てよ・・・

俺はある事を思いつき怪しい笑みを浮かべた。

「ぐふふ」

「何を笑つておるのかの

「先生は分霊箱を」存知で?」

「ほら、マグルの君がそれを知つておるとは、ビうして知つておるのかの？」

やさしい口調で語りかけるダンブルドアの表情は恐ろしかった。
(なにこの人、怖い)

「大学の図書館に資料がありました」

「どんなものかの？」

「深い闇の秘術という本に書いてありましたが」

「ふむ、マグルの世界にそんなものがあつたか」

「一般の人は閲覧できないようになつていましたから安全だとは思いますが」

「君はその本が読めたのかの？」

不思議そうな顔をするダンブルドアに俺は返答をした。

「はい、読みましたが、それが何か？」

ダンブルドアはおもむり、俺の頭に手を置いた。

「ふむ、君には少し魔力があるよつじや」

「魔力ですか？」

「い」べ微量じやが。君の家系からリリーが出ておるのでうなずける
事じやの」

「俺はスクイブといつ」とですか？」

「わからぬな。まあ今の状態なら浮遊呪文一発しか打てんじやろう
な」

俺は上げて落とすダンブルドアの高等技術に落ち込みながら言った。

「それ、何もできないのと一緒にないですか

「ダドリーには、マグルの武器があるから大丈夫じやよ。それで、
わしの知っていることは全て話したが、さきほどの条件とはなんじ
やの？」

「俺に空間拡張をかけた何か入れ物をください。それと、俺には助
手件護衛をつけて下さい。あとあなたは全面的に僕を信頼して下さ

い。」この学校で教師に命令できる権限を下さい。そして、ヴォルデモートが倒れたあかつきにはマグルの世界に開かれた魔法会にして下さい」

「マグルの世界に開かれたとな？」

「そうです。それから、もう一つ、俺がヴォルデモートの事に関わっている事は伏せて下さい」

「それだけの事を要求するからには、マグル学の教授に就任するだけというわけではあるまい」

「実は、個人的に確かめねばならないことがあります。僕の考えが正しければ、ヴォルデモートを倒せるかもしれません」

「なんどー？」

ダンブルドアは驚愕の表情を浮かべた。

「もしかしたらですけど」

俺はにやつと笑った。

介入者の悪意（後書き）

さてさて、ネビル君は何をたくさんでいるのでしょうか。
そして、思つても見ないところから帰ってきたホグワーツルート…！
わっしょいホグワーツ。

お礼参り（前書き）

ダドリーの一言日記

朝、ホグワーツを散策していたら、いきなりヒッポグリフに頭突きされたんだけど、何でだろう。

「えー今日から護衛件助手になります、ピーター・ペティグリューです」

（何これ。何の「冗談？」つていうかロンのペットにはどうなつてゐるの）

俺は、ニコニコと笑うペテイグリューを、ざわしそうかと思ひしこ事を考へたが、表情を取り繕い答えた。

「ペティグリューさん」

「ピーターと呼んでいただいて結構です」

「えーあー、じゅあピーター、そひひも敬語は結構だよ

「わかりました。あつ、わかつたよ」

（何この天然。つていうか髪のモフモフなんだナゾ）

こうして、始まった、俺のホグワーツ生活だが、俺は新学期までホグワーツにいることになつた。なぜかといえば、家に帰ると連れて来るのがめんどくさいという理由らしい。ホグワーツ特急で来ますよといつたら、それじゃハリー達の驚いた顔が見えないからつまらんじやねつとのこと。

そうこうことで俺はホグワーツに軟禁せられている。

「どうかした、ダドリー？」

「いや、別になんでもないよ。今日はどんな予定？」

「教授陣との顔合わせがあるね。始めは、セブルスだね」

「うん。なんかおかしくね？スネイプって、まずハリオ、ラブだよね。ハリオを守るためにホグワーツにいるんだよね。でも、狙われているのはネビル。これ、どうこうこと？」

「ピーター、ミスター・スネイプって元死食い人？」

「やつだよ。マグルなのによく知ってるね」

「まあ、色々とね」

「やつか。じゃあ、行こつか」

俺達は、部屋を後にした。

ホグワーツを歩きながら、俺はめまいがした。ちょっと楽しみにしていた魔法のかかったものたちは、田まぐるしく動き、少し酔つたのだ。

「どうかした？」

俺の様子にピーターが声をかけた。

「色々なものが動いていて、ちょっと酔つたんだ」

「ああ、なれないとかよつと辛いかもね」

そう言って座り込んでいる俺に手を出してきた。手を掴み引っ張り起にされると、肩を貸され歩き出した。
(うん、この人ちつちつやい)

スネイプの部屋の前まで来るとピーターはノックをした。

「なんだね？」

ノックに応答するように出てきたスネイプが言った。

「ほ、ホグワーツのマグル学の教授に、ヴォーエー」

俺は盛大に吐瀉物をスネイプに吐き出した。

「だ、大丈夫！？」

心配して背中を撫ぜるピーターと杖を振り自分の体をきれいにしながら怒りの形相のスネイプという対照的な二人を見ながら、俺は少しそつきりした。

「あ、うん。スネイプ先生のおかげで少しすつきりした」

「それは良かつた。スネイプも役に立つ事があるんだね」

こめかみを引くつかせながら怒りの表情でスネイプが言った。

「いい、いや。魔法薬学の先生だから、良い薬があるんじゃないかと思つてね」

「あると、助かります」

俺もお願いすると、スネイプは部屋に通した。

スネイプの部屋は臭い、とにかく臭い。何が臭いかって薬品と親父臭がする。

俺はマスクをする事にした。

「何をしているの？」

ピーターが不思議そうに聞いてきた。

「いや、臭いから。ペーターもする？」

そう言って、ピーターに渡すとピーターもマスクをした。そういうふ
していると、タンブラーに何かを入れた、スネイプが部屋の置くか
ら現れた。

「マグル用の薬草を煮詰めたものだ」

「マグル用の薬作れるんですね。さすがスネイプ先生ですね」

俺が驚いたよ^トうとふんっ少し嬉しそうに鼻を鳴らした。

「どうして、マグル用なの?」

「お前は聞いておらんのだな。こやつは、魔法が一切効かん。だから、魔法のかかっている薬は効かんのだ」

「え? そうなの?」

「まあ、そんな感じらしい」

「あーそれで、用が済んだら帰ってほしいのだが」

スネイプが迷惑そうに言った。

「血口紹介はすんだけど。あなたには、まだ用がある」

俺はニヤリとして立ち上がった。不敵な笑みにスネイプは少し後ろに下がったが、俺の前でその程度のバックステップなど意味がない。

「な、何だ」

「あんた、うちのハリーに『ずいぶんな嫌がらせをしてくれたらしくな』

「お前は、感謝だとこいつクリスマスプレゼントを贈つてただろう」「う

見苦しい。なんと見苦しくお粗末な頭だ。俺はそう思いながら力の限り叫んだ。

「それと、これとは別だ！マグルの力思い知るが良い」

俺は、口ロンとあるものを転がしピーターと一緒に部屋を出た。

「なにをしたの？」

「フランシス・バンセ、あと催涙弾。あつやうやう、ピーターすまないけど、この扉、開かないよ」としてくられる

ピーターは不思議そうな顔をしたが俺が早くと急かすと杖を振り扉をくつつけた。

しばらくすると、扉がバンバン叩かれ、激しく咳き込む音がした。

「ちょっと離れた方がいいかな」

俺は急ぐよつと離れた。ピーターもつこてきているなとこいつを確認した。

「バルス！！」

その言葉と同時に遠くからバンッといつ巨大な破裂音が響いた。

ピーターの顔が青ざめていたので、殺傷能力はないと言つとほつとした顔をしていた。

階段を上がつていると、今度は何かを破壊するような音が響きなにやら某大差の叫び声が聞こえたが無視を決め込んだ。

マグル様をなめるなよ。俺は、そつ一言軽くと軽やかに階段を上つた。そして、俺は部屋に戻るとまた吐いた。

お礼参り（後書き）

スネイプ先生とは陰悪といつことでお願いします。
当たり前の話ですけど、普通に戦えばダードリーはまぼうになります。何
でもありのときのみダードリーは力を發揮するのです。

ネタ追加

2012.1.10

ダドリーの凶行 モブ発覚（前書き）

ダドリーの一言じやない日記

今日は、ハリーから手紙が来た。今はクイティッシュ世界大会を観戦しに行つてゐらしい。

空飛ぶじゅうたんを見たと書いていたから、恐らくアジア圏の人間がいたのだろう。

それに加えて、頭にTの字をつけた人がいたといつていたから、恐らく日本人だらう。

まさか、本物ではないよな。いや、夏休みの冒険では何でもありだから・・・考えるのはやめよう。

ハリオは挨拶でセップク！..といつておいたと書いてあつた。

・・・ハリオは天然すきんな。お兄ちゃんも手のつけようがないぞ。

とりあえず、新学期に会おうと返事を書いておいた。

ダドリーの凶行 モブ発覚

俺は今、空を飛んでいる。もちろん、篐などではない。ダドリーだから飛べるはずもない。いちよう魔力があることなのでためしに、篐に挑戦してみた。篐にまたがり、力の限り踏ん張った。そう、力の限り踏ん張つたのだ。大事なことなので2回言いましたよ。

某、魔女っ子も真っ青なほど、空飛ぶ昆虫の名前を力の限り叫んでみたり、燃やしちゃうからねと叫んでみた。もひとつおまけにカツペイ！－シンのパイ！－と叫んでみたが何もおこらなかつた。正直悲しい。ついでに言つておくが力を入れすぎて漏らした。

魔力は本當にあるのかと疑うが、原作でもダドリーはティメントー見えているから、魔力がある可能性がある。スクイブもティメントーは見えるらしいから、恐らく魔力がないわけではなく、事象に干渉する事ができるほどの魔力がないのであろう。でなければ、マグル避けに引っかかる。一人一人選別しているのではなく魔力があるかないか、もしくは一定以上の魔力が選別になつてているのだろう。

俺は、浮遊呪文が使えるらしいから、恐らくスクイブ以上の魔力は保有しているのだろう、50歩100歩といったところだろうがな。

俺はそんなことを考えながら、空中飛行を楽しんでいる。今乗つているヒツボグリフに御礼を言うように撫ぜた。すると、突然ガクリと落ちた。先ほどから何故だか俺が撫ぜると急降下するのだ。謎だ。

その他にも最初乗せてもらおうとしたら頭突きされ、みぞおちに重

い一撃をくらいい悶えた。

乗せてもらえない俺の計画に支障が出るので弟のためなんだと涙ながらに頼むと、しぶしぶといつ感じで乗せてくれた。どうやらこれは、バックビークだつたらしく、ハリオのためならと了解してくれたようだつた。さすが、ハリオだ。こんなところでも俺の助けになつてくれる。これを、運命といわず何と言つのだ。

バックビークもハリオの事が聞きたいだりうとよだれをたらしながら思い出話ををしてやると、喜んだらしく前転、後天、果ては横回転や急降下、急上昇をした。おいおい、喜ぶのはいいが落つこちぢまうぜ。

ある家の前で降ろしてもらうと、ポケットから鳥用の餌を取り出しあげた。こちよう、鳥だよな?と不安だつたが、食べていたので安心した。

俺の今日の目的は確かめなければならない事があるからだ。
そう、俺の眼前にそびえるのはこの境遇に追い込んだ者の家だ。

ノックをすると、中から間の抜けた返事と共にパンを咥え、アホ毛を立てた女が出てきた。

(古い…)

俺は笑顔を崩さずにこやかに挨拶をした。

「チャリティー・バーベッジ先生でしょうか?」

「はい、そうです。あなたは？」

「ダドリー・ダーズリーといつもので。あなたの後任になる事になりましたので授業の引継ぎの話をしに参りました」

「は？ ダドリー？ あのデブの？」

俺は華麗なスルーテクニックを披露して返答を返した。

「ええ、今は大分痩せましたが、ハリー・ポッターの従兄弟に当たります。あの中に入つてもよろしいでしょうか？」

「え、ええ。どうぞ」

リビングに通され俺がもつてきた茶菓子と共にお茶を出された。

「よかつたわ。日本の茶菓子を持つてこられた時はどうしようかと思つたけど、ちょうど日本茶を手に入れたところだったのよ」

「先生は日本通であられたか、さすがホグワーツの教授だけの事はありますね」

「まあ、元なんですけどね。それで、ダーズリーさんは、私の後任になつたとかで？」

「はい、そうです。そういえば、先生はお辞めになる理由が死亡フラグだからと仰っていましたね？」

「あつ、それは、少し世迷言を言つてしまつまして、お氣になさらないように」

「そうですか。個人的なことで申し訳ないのですが、うちのハリー・ポッターはどんな生徒ですか？」

「ハ、ハリー君ね。授業を受け持つた事はないけれど。とっても、良い子よ」

「一年生の時は賢者の石を守つた奴で」

「そうね。クウェイティッチの技術は凄かつたわね」

「2年生の時は、秘密の部屋を見つけたとか」

「せうれい。でも、もつと奥まで進むと思つたのよね」

「3年生ではヒッポグリフだけを守ったとかで

「そうなのよね。そこが、不思議なのよね

「シリウス・ブラック普通にいましたからね」

「そうなのよー。どうして捕まつてないのって感じよ。っていうか、選ばれたのはネビルですってどんな無理ゲーなのよ」

「お前やつぱり介入者か！？」

そうして、モブな俺達はどうなつているのかを永遠と話し合つた。主に、女のウザイ愚痴だつた。彼女はどうやら、賢者の石の時に憑依したらしい。気がついたら、目の前にクイレルがいたそうだ。クイレルはマグル学から闇の魔術に対する防衛術の教授になるからと後任を頼みに来たらしい。状況が理解できず、その場は、はいと答えたそ�だ。

しばらくして状況を飲み込んだ彼女は、絶望したそうだ。

やれ、死亡決定のマグル学だの、ネビルには倒せないだのと嘆いた。私は映画派で原作の話なんか知らないから、どこで何がどうなるか分からぬから、介入せずにいたらしい。

だが、にわかファンな彼女はできれば近くでイベントを見守りたいらしく、6巻までいて、後は国外逃亡しようとしていたらしい。しかし、映画しか知らないとはいえ、明らかに自分の知っている話と違うと違和感を感じていた彼女は、とうとう、アズカバンの囚人なのにアズカバン関係ないということで逃げ出したらしい。だが、イケメンのリーマスやシリウスに会えたり、ショタッ子のハリーに会えたことには感激していた。なんという不埒な輩だと俺は内心毒づいた。

そして、八つ当たりよろしく、俺の事まで攻め始めた。

「だいたい、自分だけダドリーってどれだけ安全なポジションなのよ。

だいたい、それなのに、ショタッ子なハリーと仲良しによじですつて？イチャイチャしてれば、良いつてどれだけ美味しいポジションなのよ。

今のうちに、ボルテモートと手を組もうかしら。未来知識伝えれば少しは優遇してくれるわよね

パンツ

ニヤリとした女の挑発的な表情の横を風圧が通り抜けた。

一発の銃声が響いたのだ。

「お前、あまり調子に乗るなよ」

介入者は恐怖のあまり固まっていた。

俺が冷めた目で女の顔を見ながらゆっくり口を開いた。

「死にたくないれば、俺に協力しろ。分かつたらゆっくり、頷け」

女は恐怖の中で小刻みに震えながらもゆっくりと頷いた。

「良し、良い子だ」

俺はにこりと笑いながら言った。

ダドリーの凶行 モフ発覚（後書き）

最後の展開といつとつあるのでしょうか。
ハリーの為にはなんでもやるといつダドリー君なんですが。どうな
んでしょうかね。

改変前の文があつたので改変しました。

2012.01.11

教師としての第一歩

「今年度から、ホグワーツでマグル学を教える事になった。ダドリー・ダーズリーです。困った事があつたら何でも相談に来てください」

大広間で食事中の生徒達が唖然としていた。なにしろ自分達とそう年の変わらない少年が教授になるというのだから、その反応も頷ける。

その反応を見たアルバス・ダンブルドアが言った。

「彼は、マグルの世界でこじぶる優秀での、わしが直々に声をかけたのだ。皆、よく教えてもらひよつ。では、良く食べ、良く飲むよつこ」

晚餐の最中、ハリオ達がこちらを見て何やら話したり、あちらこちらから、俺の方を見ようと幾人かが頭を上げていた。幾人かはマグル出身者もいるので、俺のことを知っているのだろう。二コリと笑つて手を振つておいた。

まあ、その他にも俺の事を好奇の目で見るやつらもいたが。

「お前さんマグルなのか？」

「ええ、そうですよ。マッドアイ先生」

俺は、この変わってしまったこの世界でも、こいつは死食い人だと

いう確信があった。簡単に言えばやたらと懐から何かを取り出し、飲みまくるし、ペロペロしているからだ。

俺は「ほの時、」このつの事をペロペロしながらもじへはムー 勝山となずけむ」とした。

俺が部屋の戻り小説を書いていると部屋の扉がノックされた。

「はい、どうぞ」

扉が勢い良く開けられ、ハリオ達が入ってきた。

「ダード、どうこう」と一・

「なにがさ?」

「こんなのが聞いてないよ! つていうかダード一回も帰つてこないし手紙出しても意味わからなうこと書いてくるし」

「来学期会おうって書いたら」

「そんなのでわかるわけないよ」

「いやーダンブルドアがさ、ビックリする顔みたいから内緒にして
おけつて書つんだよ。悪かつたな」

ハリオはため息をついた。

「でも、危なくないかしら」

ハリーの後ろにいたハーマイオニーが口を開いた。その言葉にロ
ンが反応をした。

「そうだよ。マグルがホグワーツにいるなんてスリザリンの奴等き
つと悪をするぜ」

俺はこいつと笑つて返答をした。

「大丈夫だと思つよ。」

「どうして?」

ハリオが俺を心配して聞いてきた。

「まあ、そのうち分かるさ。それに護衛もいるから」

「護衛？」

俺が出ておいでよとこつと地面から一匹ヒーラーが現れた。

「ヒーター！」

「やあ、ハリー」

驚いている三人に俺の護衛だと紹介しておいた。

「まあ、それなら良いんだけど」

「教授として会うときは、それなりの対応をしてくれよ

ハリオ達はわかつたと嘘いつと部屋を出て行つた。

「俺が、廊下を歩いて教室に向かっていると、上級生らしき生徒が立ちはだかった。

「すまないがどいてくれるかい?」

「ああ、マグルの先生じゃないか。マグルすぎて見えなかつたよ（意味がわからない。マグルすぎて見えないとはどういう現象だ）

「すまないが、マグルすぎてみえないとはどいつとかな? 魔法族は、マグルが見えにくいいのか」

少年は、にやにや笑いつと書いた。

「マグルなんてその辺の石じりと変わらないから、見えなかつたんですねよマグルの教授先生」

「一つ訂正しておぐが、マグルの教授ではなく、マグル学の教授だ。それでは、いろいろな意味に取れてしまつてわからない。言葉ははつきりと使いなさい」

そういうと、まわりにいた生徒がくすくすと笑い出した。

怒った、少年は袖に手を突っ込んだ。まわりの生徒の表情が変わった中、少年はにやりと笑い腕を上げた。

しかし、少年は次の瞬間宙を舞っていた。

ドスンという音と共に落ちた少年は、そこそこの体重があったようだった。

「すまない・・・俺は肉体ポテンシャルはジュニアボクサー準優勝なんだ」

俺は、少し申し訳なげに手を差し出した。少年は、手を振り払うと去っていった。

「まったく、人の疑問に答えずさつしていくなんて、俺を試そうとうのか」

あとで調べる事にして、教室に向かつた。

「では、まず、マグルについて、マグルと魔法族は元々は一緒にあった。起源はわからないが、それぞれ別の進化をたどったといえる。マグルの世界でも、伝説上の魔法使いや動物達の伝説は残っている。しかしながら、それは空想上のものというのが今のマグルにおいての常識だ。しかし、ながら未知のものに対する学問は盛んに研究が行われている」

「先生」

突然、女生徒の声が響き手が上がった。

「先生にとつての魔法という存在はどういうものですか?」

ハーマイオニーの質問だった。

「質問の意味がわからないが」

俺は、困り果てて質問を返した。

「先生はマグルですよね。先生から魔法という存在を見ると、どう見えるのか。直感的なことで良いので教えていただけると、この授業のスタンスが少し分かるかもしけないので教えていただけないでしょうか」

そういうことかと納得すると共にあらためてハーマイオニーの聰

明さを感じた。

「そういうことか、グレンジャー。質問に答えよつ。俺から見て魔法は、芸術に近いものだと感じる」

生徒達はきょとんとした顔をしていた。それはハーマイオニーも一緒だった。俺は続けた。

「人の思いや、内在する魔力によって威力が変わる。魔法というのが人によって威力が変わる。道具にそれほどの違いがなくともだ。つまり杖さえあれば、努力をすればいくらでも伸びるということだ」

「しかし、先生、魔法使いにも才能があります」

「才能とは何をもつて測ることができるのかな

ハーマイオニーは押し黙った。

「君の言うこともわかるよ。ある程度のステータスは必要かもしないが、それ以上に想いというのは重要なのだ。君のように魔法使いの血が薄いものでも実力にはさして関係ないだろう。特別に魔力が少ない者がいるがな」

「魔法は想いだといふのですか？」

「いや違う。魔法は根性だ！息継ぎもせぬほどの努力をし、生死の

境をさまよい、魂をすり減らし、その先にあるものこそ魔法なのだ。しかし、それは魔法だけではない。全ての学問に通ずるのだ」

一同はあっけにとられたように口を開けていた。

（精神論は意味がわからないか。授業形態を少し変えるか。ホグワーツの授業は魔法のエキスパートを育てるだけのようだから、本来は各授業が作用しあうようにしなければならないんだが、勉強の仕方を何も分かつていなければ。もうすこし、実技形式の授業にするかな）

「俺の魔法に対する考えは述べた。次は君らにマグルに対するイメージを述べてもらいたい。終わつたものから帰つていいぞ」

俺は、そういうと、次の授業に向けて授業計画書を書き直し始めた。

日常 ネビル君のマグル式薬草学（前書き）

ダグリーの一言口記。

夜、『はんを食べている時、ふと疑問に思った。

まわりの教授陣はワインを飲んでいる。

生徒はパンプキンジュースを飲んでいる。

俺は、コーラを飲んでいる。

俺は、なぜ自分だけコーラなのかといつと、突然目の前にルートビアが現れた。

どうこう、ことだ？

口算 ネビル君のマグル式薬草学

「どれくらい経つただろうか。」ヤーといつ猫の鳴き声で我に返った。
外から来る光が赤い。どうやら、集中している間に口が落ちかける
時間になってしまったようだ。

ふと、先ほどの声のほうに目を戻すと、そこには猫と蛙がいた。

「これは、クルックシャンクスとトレバーだろうか？」

思わず、声に出して言つて、ニヤー、ゲコと声が返ってきたので、
魔法界のものは人語が理解できるのかと不思議に思つてしまつ。

「お前らは、人間か？」

「やー、ゲコ。

「お前らはバカか？」

「やー、ゲコ。

俺の声に反応しているだけだと納得し、机からチーズとビスケット
を出し与えた。

食べ終わるのを見計らい声をかけた。

「さあ、主人のところに帰るつか」

そういうて、トレバーを抱えた。クルックシャンクスは足元をつい

てぐるようだ。

グリフィンドールにつべと合言葉をいい中に入った。

「ロングボトムはいるかな?」

俺が声をかけると、不思議そうな顔をして振り向く小年がいた。

「きみがロングボトムか?」

「は、はい」

俺の言葉に不安そうな表情を浮かべながら返事をした。

「迷い蛙がいたから連れてきたよ」

「じつと微笑みながら言った。

ネビルが安心したような顔になつたので、俺も安心した。

「おや、薬草学の勉強をしているのか」

ネビルが先ほどまでいた机の上を見ると薬草学の本らしきものがあったのだ。

「植物が育たないんです」

そういつて、鉢植えを指差した。

「うん? あれは、マグル界の植物じゃないのか?」

「ナウです」

ふむと、俺は考え込んだ。もしやと思い、確かめてみた。

「もしかして、ずっと部屋の中におこるのかな

ネビルは口クリと頷いた。

「日に当たなければ育たないよ

「日に当たったをさせたほうが良いんですね？」

俺はどう説明しようか悩んだ挙句、まあ普通に説明した。

「魔法界だと植物によつては観察しながら、日に当たたり、引っ込めたりするんだろうけどね。マグルの世界の植物は基本的に日に当てたままにしなきゃ育たないよ。光合成ができないからね」

「光合成ですか？」

「うん。光がないと、飯が食べられないんだよ」

魔法界の人間に一から説明するのは難しいから安易に説明した。

「光を食べるんですか？」

「実際に食べるわけじゃないけど。光から元気をもらひて一酸化炭素を分解する時にできる炭水化物ついていう」飯を食べているんだよ

「マグル学ではそういうことを教えているんですか？」

「いや、みんなのスタンスがわからなかつたから、授業計画を考え直しているんだ」

ネビルは何やら考え事をしているよつて黙つて俯いた。

「マグル学に移つても良いですか？」

俺は、ネビルの言葉に不安を覚えた。ここでのネビルは生き残った男の子だ。正直、占い学などはどうでも良いが、シビルの言葉の端々には伏線のよつなものが多々ある。はたして受け入れて良いのだろつか。

「占い学が嫌になつたのかい？」

ネビルは困つたよつな顔をしながら答えた。

「ナウにつわけじやないんですけど」

「ならば、聞きたい」とがあればこつでも俺の部屋に来ねばよいよ

「でも」

そう言つたきり黙つてしまつた。

俺は考えた。シビルの発言はほとんどがこの先の展開を予期するような発言だったが、あれは読者でなければ分からぬ発言だった。
電波モードは今年は特に関係ない。

「じゃあ、お試し期間として受けてみるかい?」

ネビルは田を輝かせた。

「はいー!」

子どもといふのは素直だなと思ったが閉心術も学ばなければなとも
思った。まあ、俺も子どもなんだが。

「教師でないときは、同年代として扱つていいくぞ」

俺は、そういうととの場を後にした。

「なんですか、これは？」

ミネルバの部屋に声が響いた。

俺は、向田もかけて授業計画を再構成したものを副校長であるミネルバに提出した。

すると、ミネルバは驚いたよつに声を上げたのだ。

「驚かれるのは当然ですが、ホグワーツの授業は少々マスプロ的すぎます。学校では生きる知恵を与えるくては教育とはいえないですよ」

「しかし、これが何の関係があるのですか」

計画書のある部分に指をさして言つ彼女に俺は笑みを浮かべて答えた。

「勉学には必要な事ですし、マグルを理解させるのには一番手つ取り早い方法です」

ミネルバはとても困った顔をしていた。

「しかし・・・」

「では、試験期間という事にして下さご。成果が出なければ変更し

まあ

「そこまでこうのなら、わかつました」

不服そうな彼女に俺は笑みを絶やせなかつた。

俺が廊下を歩いていくとトレバーがまたしても単独でぽつりと廊下にいた。

「また、迷子になつたのかい？」

俺は、独り言のように語り掛けた。

トレバーにポケットからピースケットを取り出し、かけらをあげた。

トレバーが食べるのを見てみると、廊下にある扉がガチャリとなり、勝山が出てきた。

「声があると思えばお前か」

「ここにアラスター、授業の準備ですか？」

「そんなどころだ

「俺も、授業計画の変更をしてきたといふなんですよ

「やうか

「王立ちする勝山に俺は言った。

「いじにこると邪魔ですか?」

無表情で聞く俺に勝山が答えた。

「すじぶるな。スースコープが回つてたまらん」
（かくれん防止機ね・・・）

「やうですか。では、さつさと行きますか。おいでトレバー

トレバーを片手に俺はその場を後にした。

トレバーをグリフィンドール寮に返し、廊下を進み俺の部屋の前まで差し掛かったとき、足を止めた。

なぜなら、そこで、怪しげな物体が置いてあったからだ。そして、どこからか視線も感じる。

俺は、それを避けながら通過すると、柱に隠れていたものが出てきた。

「教授…どうして分かつたんだ？」

何か双子だった。

「どうしては？」

「見えないよう[魔法をかけたんだぜ」

「いや、見えるからわ」

俺は指をさして答えた。

双子は驚きの表情を見せた。うん、相性ぱっちりマナカナだ。いや、違うマナカナを男で例えるなど、冒涙だ。

マナカナに囲まれて、両方から告白、悩む俺。何てすばらしいんだ。今の俺の顔ならいける気がする。

あれ、でも今マナカナ幼女だ。駄目だ。駄目だ。そんな危険な発想は駄目だ。

いや、でも、ありかな。愛されあればありかな。この世界では許されるかな。

ハリオの親一ートで18、19で結婚だからな。校長もハリオがこつてゐしな。

いや、でも俺の年齢だと年上キラーも良いかな。ベラ様とかいつちやうか。綺麗だしな。ああいうのを躊けるのも良いかもしねない。いやでもバツイチのミネルバを落とすのも良いかな。

何か、俺、熟女ハンターみたいになつてる。

俺の年齢つてこいつなのだらつかと考えた。今の年齢あわせると・
・30手前か！

やっぱー、俺おっさんだった。ピーターと似たようなもんだ。

マジで体は子ども頭脳は変態のおっさんじゃないか。

「あの教授？」

「駄目だ。何か目がいつちやつてる」

「じつあぬよジロージ

「決まつてゐるだろフレッド」

二人は、ニヤリと目を合わせた。

その日阿鼻叫喚の中グリフィンドールの点数は大幅に減らされた。

日常 ネビル君のマグル式薬草学（後書き）

薬草学の温室は日光を当てていましたけど、日向ぼっこさせてあげると喜ぶ植物があつたような気がしたんです。それで、日常的に光に当たなくともいいものがあるって思つたんですけど・・・

そういうれば悪魔の罠つてどこので育てるんですかね。悪魔の罠用の暗い部屋ですかね。

というか何を栄養にしてるんですか？

魔法ですから何でもありなのかな・・・

違うよ。ってことがあつたらいい指摘ください。

次回

ダドリーのマグル学改変計画始動

杖？魔法？

そんなことは聞き飽きた！！

肉体改造だ！！！

お詫び

気づかずやつてしまつたんですが前回の話で、映画版のクリウチ・ジユニアの舌を出す設定を組み込んでしまいました。
原作だと、そんな設定なかつたのに・・・すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342z/>

介入者はモブばかり

2012年1月14日19時54分発行